

論文題目 ルイス・カーンの建築作品に関する研究
－ 軸構成と「ずれ」の手法

この論文は、ルイス・カーンの建築作品に見られる視知覚的効果と、それを生起させる建築的手法を明らかにすることによって、カーンによって作られた空間を実際に即し理解することを目的としている。

本論文は、五つの章によって構成されている。

第1章では、研究の背景と目的、研究対象と分析方法が説明される。これまでルイス・カーンに関する研究は、その思索、あるいは概念的な空間構成や設計過程の分析に限られてきたが、本論文は、カーンの建築作品における実際の空間の知覚像と、その建築的な手法を実証的に示すことが目的とされる。カーンはアメリカンボザールとモダニズムの両者から影響を受けており、その作品においても軸構成と軸からの「ずれ」が生む知覚的効果について分析することによって、十全な空間構成の理解に達することができるとされる。

研究対象は適当と判断される53作品が選ばれ、その中でも完成度が高く、かつ年代的な偏りがないよう選択された10作品について知覚像の詳細な分析が行なわれる。

次いで、二段階に分かれた分析方法が説明される。具体的には53作品について軸構成と「ずれ」のあり方が検討され、次に三次元モデリングを用い空間のシークエンシャルなシュミレーションを行ない、軸と「ずれ」によって生起する空間的効果を明らかにするという手順である。分析の項目として、1) 主軸の抽出、2) 建築構成の変形、3) 軸構成の類型、4) アプローチとエントランスの位置、5) 内部の軸、6) 軸構成に対する「ずれ」、7) 視知覚的分析の七つが挙げられている。

第2章では、分析に先立つ予備的な考察が行なわれる。前半では、カーンの教育的背景、即ちアメリカンボザールの設計方法、ならびにカーンが影響を受けた建築家等の思想、設計方法、作品の特徴などを概観した上で、カーンの各作品における具体的な影響関係について考察している。

後半では、カーンの経歴と既往研究を概観して、既往研究は四つのカテゴリーに分けられるが、いずれも作品の空間的特徴の理解という点で不十分であることが説明される。

次いで、研究目的との関係から、建築における知覚作用と知覚形態の概念を論じている。建築の形態には存在形態と知覚形態が存在し、空間の体験はその両者から成り立っているとされ、客観的な概念化作用を重視する存在形態の分析に加え、実際の知覚を重視する知覚形態の分析が必要であることが論じられる。

第3章では、上記の手順に従って、カーンの53作品の分析が行なわれる。まず、図面、写真等の資料と実地調査の結果を総合し、空間構成と軸構成、アプローチと内部における動線軸を抽出し、アイソメトリックの模式図として表記される。

次いで、上記 53 作品の分析結果が、平面、パーティ、変形、エントランス位置、アプローチの各項と、それらを総合した分析図を列記した一つの図表にまとめられる。これから、例外的な作品を除く 48 作品に、対称型、一軸併置型、集中型、グリッド型の四つの軸構成の類型が存在すること、「ずれ」には建築的な「ずれ」と動線の「ずれ」が存在し、前者は軸構成の崩れと対立する軸構成の併置の二つに分かれることが示される。また、軸構成の類型と「ずれ」には相関関係が存在し、対称型と一軸併置型では建築的変形が少なく、逆に集中型ではそれが多く、グリッド型では輪郭形の違いによって他の三類型と同様な傾向が存在することなどが明らかにされる。

第 4 章では、選択された 10 作品について、コンピューターのモデリングソフトを用いた空間シュミレーションによる空間の視知覚分析が行なわれる。分析は、建築の平面図上でアプローチと内部における動線軸を図示し、アプローチの動線軸上から見た対象建物外観とエントランスの見え方、次いでエントランスからの内部空間の見え方、さらに内部空間を進み中心空間に達するまでの空間の見え方が呈示される。

第 5 章では、4 章の分析結果に考察を加え、結論が明らかにされる。まず、観察者の行動と視覚像の変化をアプローチの「ずれ」、エントランスの「ずれ」、内部動線軸の「ずれ」の三段階でまとめ、知覚形態を抽出している。アプローチの「ずれ」では、観察者の旋回によって像の回転が、接近によって拡大と重層的展開が見られることが示される。エントランスの「ずれ」では、視線の遊動によって探索的な諸段階を経て全体像が形成されること、視線の旋回によって面の継起的展開が生起すること、さらに、内部空間における「ずれ」では、観察者の旋回によって面の継起的展開生じ、また脱軸と軸上の動きが交替し、動的な空間と静的な空間の知覚が継起することが明らかにされる。さらに、旋回しつつ中心に接近することを通し、中心のある明確な領域が知覚されることが明らかにされる。

また、中心空間に到るプロセスには最短距離で結ぶことと流動的空間を経由させることの二つパターンが存在し、共に中心空間が予測されないように計画されていること、カーンの中心空間がボザールのそれと対照的に、遠心性をもつことなどが示される。

以上をまとめ、「軸構成とずれ」による知覚像の特徴として、アプローチにおいては視覚像の回転と拡大、エントランスにおいては部分視が重なった全体像の形成、ならびに面の継起的展開、内部においては視覚像の回転と、明確な中心を備えた空間形態の認識であるとされる。

最後に総括として、カーンの建築作品には、「ずれ」の手法が生み出す変化に富んだ知覚像が、安定した静的な空間と共存することによって、明確な領域と中心をもつ空間の認識に到る一連のプロセスが生まれていること、そのプロセスこそ、カーンの言う「ルーム」の感覚の実体に他ならないという解釈が明らかにされる。

以上のように、本論文は、従来の静的な形式理解では捉えられないカーンの作品における空間的現象と、それを生起させる具体的な手法を明らかにし、また、CG という限定はあるものの、シークシャルな空間体験を擬似的に再現し、評価するための方法を呈示した。本論文は、建築の豊かな空間現象を理解し、建築設計へも応用可能なこうした基本的知見を明らかにすることによって、建築設計・設計理論分野の発展に寄与した。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。